



そのイスラエル全体に、聖なる油が注がれるということが言われますけど、ここの段落には、下るが2回あります。ひげの上を下る、衣の裾にまで下る、そして露もシオンの山々の上を下るということですが、これは、都上りの歌と言って上ってきたのに、祝福は下ってきたということです。上り下りするという言い方が、ヤコブのはしごのところにあります(創世記28:12)。これは上ると下るというペアの言い方の下るのほうですね。天から神殿から祝福がくださる、下ってくるということが、この133篇の全体の概略になります。

アロンの装束がどういうものなのか、栄光と美を表すその衣はどのようなものなのかは、出エジプト記を見てください。注がれる油、聖別する聖なる油は、調合方法も書かれています。その香油については、出エジプト記の30章あたりを見ましょう。それと裁きの胸当てとか、肩にイスラエルの名前がついているとか、そこに油が流れているという事ですからね。その油を注がれて聖なるものとされる喜び、永遠の命が与えられる喜びをいち番一緒に集まって喜ぶ祭りが、7月の仮庵の祭りだということになりますけれど、この都にもう1度バビロンから上ってきて、エルサレムに集まって、喜びの感謝を捧げる箇所、エズラ3章、ネヘミヤの7章のところからを見ると、面白い言い方で「一人の人のようにイスラエル人たちが集まってきた」というふうに書かれてその話が始まります。エズラ3章1節やネヘミヤ8章1節のところに「一人の人のように一つになって集まってくる」という言い方がされています。

ヨハネ福音書の17章、大祭司の祈りと言われるところですが、そこでは「子の栄光を現してください」と御父に頼んで、永遠の命の祝福、信じる者たちがひとつになるということを求めている祈りを大祭司が捧げています。イエス様は民が愛においてひとつになる、永遠の命を持つ。これを御父に頼んで、それを与えてくださるならば、子の栄光が現されますということを強調して、大祭司として生贄につく前の祈りを捧げているということです。

その約束通りに、使徒行伝2章のところで御霊が与えられました。御霊が民に注がれたというところでその始まり2章の1節のところに、一つに集まってきた、一つになって座っているということが、その御霊が注がれる時の民の状態の表現になっています。それで使徒行伝2章46節では、その教会に聖霊が注がれて、みんな喜びと純真さを持って集まっているということが書かれています。

その建てられた教会は、「御霊の一致を求めてキリストの妻として清められなさい」というのは、エペソに書かれているとおりですね。そして最後の聖書の結論のところ、クライマックス。黙示録の21章、22章のところに、「新しい都、新しいエルサレム、聖なる都が天から下ってくる。キリストの花嫁として下ってくる。命の水を飲みなさい。」とされている黙示録のところまで、この133篇の祝福は、流れ出ているということで、仮庵の祭りの喜び楽しみが、いちばんあらわれているところだということが言えると思います。

都上りの祝福の最後の2つの133篇、134篇の片方がこの133篇です。